

Title	プロジェクトJSTという授業： アート・デザイン・コミュニケーションによる研究科横断コミュニティの形成
Sub Title	
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.95 (2023. ) ,p.[41]- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000095-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000095-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈寄稿〉

プロジェクトJSTという授業：  
アート・デザイン・コミュニケーションによる  
研究科横断コミュニティの形成

岡 原 正 幸\*

## Keio Spring の始動

大学院社会学研究科では、2022年度より新たに「プロジェクトJST」という授業を開設している。この授業の概要や趣旨や活動を報告することで、学問の細分化、現代社会の風潮、そしてコロナ禍を掻い潜る大学院教育のひとつのありようを伝えたいと思う。昨今、文理融合、部門横断型の総合知なるものの創出を、国をあげてターゲットにしている感がある。その一つが次である。

JST SPRING、科学技術振興機構による次世代研究者挑戦的研究プログラムが2021年度秋より始動した (<https://www.jst.go.jp/jisedai/index.html>)。慶應義塾もこの公募に応募し「未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成」プロジェクト(Keio-Spring)が採択され、武林享さん(医学部教授 研究連携推進本部本部長)を事業統括として、全塾13研究科の博士生を対象に事業を進めている。本事業の最大の特徴は、JSPSの「学振」などと異なり、研究費や生活費の助成を学生個人に行うだけでなく、大学院(大学法人)が既存の枠組みを越えた挑戦的な取り組みを博士生が行えるように、キャリア開発や育成コンテンツを提供する責務を負うということである。平たく言えば、既存の縦割り、部門別の教育システムとは異なる育成プログラムを、専門を越える院生に提供することになる。塾では、研究連携推進本部が中心になり、経済学研究科、メディアデザイン研究科、システムデザイン研究科と並んで、社会学研究科が育成コアプログラムの企画運営を担うことになった。

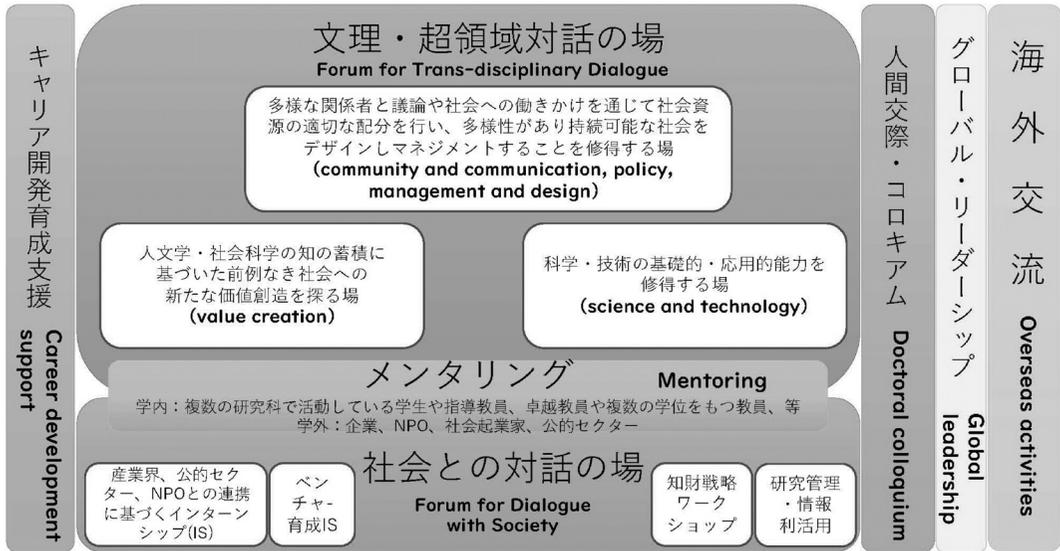
慶應義塾の全体プロジェクトの立て付けは、統括本部の武林さんによる図表1にある通りで、「文理・超領域対話」「社会との対話」を基本にしつつ、それぞれの専門領域が相互に触発しつつより豊かで創発的な総合知が形成されることを柱にしている。博士生個々人に向けては、慶應義塾の目的でもある先導者として未来社会をデザインし、社会の中で貢献できるよう促すために、キャリア開発、グローバルリーダーシップ、国際交流、人間交際(たとえば研究科を横断する研究コミュニティの形成)のスキル習得やトレーニング機会を提供している。社研では、より多様な一般的な場面で利用可能であるようなスキルあるいは総合知形成に寄与するツールとして、アート・デザイン・コミュニケーション体験を

\* 大学院社会学研究科委員長(2023年3月まで)、慶應義塾大学名誉教授

未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成プロジェクト  
Nurturing of doctoral students who will map the grand designs for future society

キャリア開発・育成コンテンツ

PhD Professional Development Pathways Platform



提供することになった。

この次世代育成の一環として、社会学研究科が提供する「コアプログラム」(Keio-Spring に採択された全塾 13 研究科博士課程の院生が必修・推奨として受講するように求められるプログラム)について、その狙いを明らかにしたい。端的に言えば「未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成」プロジェクト (Keio-Spring)、この全塾の枠内で、「対話の用法」「対話の多様性」を狙っている。Art/Design/Communication の頭文字をとり、A/D/C と社研コアプログラムを呼んでいる。

社会学研究科は 21 年度には三つの講演会 (シンポジウム) を主にオンライン (動画配信) として実施し、Spring 採択者が全員視聴する必修のプログラムとして設置した。これらのシンポジウムに関しては後ほど解説しよう。そして 22 年度には対面で行われるワークショップやフィールドワークといったコンテンツを運営し実施するために研究科横断の授業「プロジェクト (JST)」を社研では設置している。この授業の履修者は 50 名近くになり、全採択者数 260 名の中でかなりの学生が関心を寄せてくれたことがわかる。この授業の担当者も研究科横断で、加藤政策・メディア研究科委員長、山口文学研究科委員、本間 KeMCo 専任講師、アーティストの小泉明郎、そして社研委員長の岡原が共同で担当した。

対話の場というプログラム理念

先の Keio Spring の図にある通り、慶應義塾の博士人材育成プロジェクトには、その肝として「対話の場」が据えられている。その対話の「場」には三つの場が設定されている。「多様な関係者と議論や

社会への働きかけを通じて社会資源の適切な配分を行い、多様性があり持続可能な社会をデザインシマネジメントすることを修得する場」, 「人文学・社会科学の知の蓄積に基づいた前例なき社会への新たな価値創造を探る場」そして「科学・技術の基礎的・応用的能力を習得する場」の三つである。この三つの場を囲むように、海外交流、グローバルリーダーシップ、人間交際・コロキウム、キャリア開発育成支援が立てられ、そして下支えにメンターによるサポートと、より広範な社会部門との関係構築、つまり社会との対話が据えられている。

この基本構図を考案する過程で、全塾 13 の博士後期課程をもつ研究科委員長の誰もが問題視していたのは、縦割りによる部門間の交流の少なさであった。信濃町、芝、矢上、湘南藤沢では一部で共同の研究事業が成り立っているが、三田や日吉の研究科との分断は明確で、それらの研究科の院生が横に繋がるチャンネルはほぼ皆無だったのである。なので、ある意味で研究室、研究科、それ自身が独立自尊の極端な実現に向けて突っ走ってしまい、他の研究室、他の研究科、社会からは独立（孤立）して、ことをそれぞれ進めていたと言えるかもしれない。

同じことを障害学生支援という文脈でも私は感じてきた。慶應義塾大学は残念ながらほんの少し前まで障害学生や障害のある受験者へのサポートを専門に行う部署を設置していなかった。六大学の中で比較してもその遅滞ぶりは目を覆うものだった。とはいえもちろん、門を閉じていたわけではなく、実際には配慮の必要な学生一人一人に個別に各学部や通信課程、入学センターなどが対応してきたのも事実である。30 年以上前に重度の身体障害を抱えた通信生への特別の配慮（ノートテーク）を通信事務室に要求したのが懐かしい。各学部の学習指導や通信の事務は、それぞれが独自の尽力と工夫で個別に障害学生に対応してきた。しかし、縦割りの中で、その知恵が蓄積されることはなく、失敗談も継承されず、各部門がいつもゼロから立ち上げなくてはならなかった。社研でも少し前に全盲の留学生への入試を実施したことがある、英語翻訳問題に英語読み上げソフトを使うのだが、その際に得た知恵を他の部署に伝える術やプラットフォームがない。ようやく協生環境推進室の設立とその活動で、義塾の中で全体をサポートし、塾内の知恵や体験をアーカイブする窓口ができたのである。

各人各部門が独立して動く、これは慶應精神そのもの。だから各部門間にあるべき横糸の欠如は、この精神の故だとも言いたくなる。しかし、慶應精神から言えば、一人でも、一つの研究科でも、各領域を横に繋ぐ営みを起こすことはできるのであって、そう考えれば、実際には慶應精神の不徹底だったと言うべきかもしれない。

翻って、灯台下暗し、社会学研究科の中でさえ、社会学、心理学、教育学の三つの専攻に所属する教員や院生が、横につながって、研究や教育を振興することは少ないかもしれない。後ほど社研コアプログラムのシンポジウムについて述べるが、そこではアートに関して研究実践をしている社研の教員 3 名が登壇することになった。しかし、それぞれ三つの専攻所属の教員で、シンポジウムの席では、今まで協力してこなかったのかと首を傾げたほどである。

研究上の交流の乏しさだけではなく、コロナ禍にあって、実感としても人と人との交流が閉ざされている中で、それぞれの専門知を担う研究者がとにもかくにも集まることによって想定外のエネルギーが産み出される、このことへの期待は、各研究科の部門長の思いとして非常に高かった。たとえば「人間交際・コロキウム」というプログラム、このイベントは年に一回（起案者の KMD 委員長の稲陰さんは「慶應版ダボス会議」と称していました）、院生が集い、自らの研究に関して他の専門外の院生と語り交流する場として設計されている。この観点で、喜ぶべきことがある。Keio Spring では事務局やコアメ

ンバーの教員、そして採択者の連絡ツールとして Slack を利用しているが、そこに流れる情報を見ると、院生たちは自ずとコミュニティを作り、それぞれの研究についての解説を月に一回は自主的な研究会として実施している。この会の発起人の一人が社研の院生だからというのではなく、僕ら研究科委員長が期待していたアクションが瞬く間に始動したことに、塾生への敬意と希望を改めて感じ入ることになったのである。

さて、対話の場に戻ろう。社会学研究科の知が、人文学・社会学の知であることは言うまでもない。だから Keio Spring では「人文学・社会科学の知の蓄積に基づいた前例なき社会への新たな価値創造を探る場」を担うことも言うまでもない。しかし、社会学研究科で提供されたコアプログラム A/D/C の狙う方向はそれにとどまらない。下記の「アート表現・デザイン・コミュニケーション」のコンセプト図を見てほしい。JST 本体や慶應義塾評議員会など主要な会議体での説明を念頭に書かれたものである。

大学を巡ってよく言われる対話というと、専門家どうしの、教員と学生の、あるいは専門家と社会の対話であるというふうに捉えられるが、ここで意味しているのは別である（もちろんそれを排するわけでもありませんが）。対話というコミュニケーションが起きる場面として、A/D/C は三つのレイヤーを挙げている。それぞれにいかにかのアートのデザイン的な思考や感性が生かされるのかも重要である。その三つのレイヤーとは、「自己と自己とのコミュニケーション」「研究者と研究者の分野をまたぐコミュニ



#### コアプログラム CORE Program

### アート表現、デザイン、コミュニケーション Art/Design/Communication (A/D/C) Program

Dean of GSHR 社会学研究科委員長  
Okahara, Masayuki 岡原正幸

- ✓ 自己と自己のコミュニケーション（自分の学問的成果を自分の表現や個性という次元でもとらえることの意義）
- ✓ 研究者と研究者の分野をまたぐコミュニケーション（アートの多義性、多様性は、サイエンスの前提とは異なる次元での対話を自由に促すことができ、分野をまたぐ知の創造、新しい分野の創出につながる）
- ✓ 社会とのコミュニケーション（多様で複雑な社会・コミュニティと、それぞれ適切なコミュニケーションを立ち上げるツールとしてアート表現が利用できる。アートによるエンパワー）
- ✓ 直感・感性を研究者が培い、研究自体に想像力をもたらす

アート表現系プロジェクト  
(アート思考・ABR\*/RBA\*\*)

#### 〈多元・多声的〉社会との対話の場

VUCAワールド：現代社会を予測不能な社会動態とみる（2016年ダヴォス会議）

Volatility 不安定  
Uncertainty 不確定  
Complexity 複雑  
Ambiguity 曖昧

国籍、性、年齢、職業、育  
児・介護、障害など  
多様な社会コミュニティへ  
アウトリーチ

KeMCo, 慶應大学アートセンター, SFC・KMD Forum

#### アート・デザイン系メンタリング

学内：コミュニティ・コミュニケーションをテーマにするアート・デザイン系の学生やその指導教員  
学外：アーティスト（演劇・映像・ダンス等）、キュレーター、アートプロデューサー、等

国内外フィールドリサーチ  
(コミュニティの社会課題・記憶)

文理対話の触媒  
としての  
アート実践

文・理・芸

研究成果＝作品  
→ 個性・表現  
研究に想像力を！

\*. Arts-Based Research/ \*\*. Research-Based Art

ケーション」「社会とのコミュニケーション」である。

コミュニケーションという語の感覚からすれば突飛かもしれないが、まずは自己とのコミュニケーションである。自己と自己との対話、それは他者や社会との対話によっても誘発される対話であり、コミュニケーションのアルファでありオメガかもしれない。自己と自己との対話を促さないような、他者や社会との対話であるなら、それはコミュニケーションというより情報のやりとり過ぎないだろう。自己を発見する、自己の中の他者性を見出す、それが自己対話である。アートの感性は研究行為自体を自己の表現行為として見ることを許し、研究成果をアート作品として感じることで、研究自体にもまったく様相の異なる視角や問題意識をもつことができるようになるだろう。

アートにある多様性や多義性への寛容は、一つの真理をめぐりゼロサムで闘争するような科学的営為とは違う。そのため、異なる背景を持つ研究者同士を接着しやすいという効果がある。研究者どうしのコミュニケーションそれも文理融合はもとより理系各分野の協働には、近代科学が科学者なるものに強いてきた思い込みを解くような接着剤、つまり一部を溶解させて圧着するような、そんなコミュニケーションの仕掛けになりえるアート体験が有効だと思う。そして社会とのコミュニケーション。専門家を離れたコミュニティへのアウトリーチや社会実装、あるいは社会との対話・フォーラムにあつては、アート系デザイン系の発想や表現方法、ツールは有効である以上に、必須だとも言える。なぜなら専門的な表現法に拘ることを捨て、相手に向けた表現を促すからである。そして、社会科学系のフィールドリサーチで、多様なコミュニティに住まう多様な他者の言葉に触れ、その他者に敬意を払いつつコミュニケーションを行なっていく術は、専門研究者が社会という「クライアント」と交流するときの大前提になるはずである。

以上のように、コミュニケーションを誘発する触媒として、社研コアプログラムが提供しているのが、アート表現系プロジェクトと国内外フィールドリサーチという立て付けになっている。アート系デザイン系のワークショップには ABR, RBA というアートベース・リサーチあるいはリサーチベース・アートという学問・アートにおける新規な諸実践を土台にした枠組みを設置している。岡原研究室（学部および研究科）ではこの十数年 Keio ABR と称して、この国の社会科学における唯一のアートベース・リサーチあるいはパフォーマンス社会学の拠点として、国内国際学会での発表を重ねてきており、その実績の上に提案されている。

## A/D/C コアプログラム

では社研 A/D/C コアプログラムのコンテンツを紹介しよう。

2021 年度秋にはまず、動画視聴のコンテンツとして三つが用意された。そのうちの一つは、幸運なる偶然の産物だった。社会学研究科の特別招聘教授である南オーストラリア大学のアンソニー・エリオット教授より 2021 年夏の終わりに社研との共催でオンライン講演会を開催しないかという申し出があり、そのテーマが AI という Keio Spring の主要テーマでもあったので、社研 A/D/C のキックオフとしては打ってつけの機会となった。11 月 15 日 スイス、オーストラリア、東京の 3 点を結んだ、オンラインイベントである。JST 採択者はリアルタイムにオンライン視聴あるいは後日動画視聴をすることができた。

「AI 時代の社会科学：挑戦と論争」

Social Science Since AI: Challenges and Controversies.

講演者 1 : アンソニー・エリオット (南オーストラリア大学) Anthony Elliott

「AI 批判: その条件と帰結」 “Critique of AI: Conditions and Consequences”

講演者 2 : ヘルガ・ノヴォトニー (チューリッヒ工科大学) Helga Nowotny

「AI を信じて: 予測アルゴリズムの力・幻想・統制」 “In AI We Trust: Power, illusion and control of predictive algorithms”

二つ目は、社会学研究科主催の講演会として、アート表現やアートの感性に関するものである。社研の、三つの専攻に所属する教員が、それぞれ独自にアートをテーマにした研究教育実践を行っており、それぞれの観点から、アート表現の意義が議論された。11月27日、三田キャンパス南校舎ホールおよびオンラインでの同時配信を行った。

「アートの感性・表現・思考と科学的な営為」

Art and Science, or Artistic Thinking in Science

講演者 1 眞壁宏幹 (教育学専攻・社会学研究科委員)

「シンボル生成としてのアート」 “Art as symbol formation”

講演者 2 川畑秀明 (心理学専攻・社会学研究科委員)

「アートの効用を科学する 心理学における感性研究の過去と未来」 “The science behind the benefits of art; the past and future in psychology of aesthetics”

講演・司会 岡原正幸 (社会学専攻・社会学研究科委員長)

「アートを使う！」 “Just do It!”

三つ目は、かつてキャンパス近くで「三田の家」を開設し運営し、今も、港区からのコミュニティ事業を受託している三田の家 LLP のメンバーに、コミュニティデザイン、居場所づくりを話題にして語ってもらった。12月20日 東館8階ホールおよびオンラインによる同時配信。

「コミュニティをデザインする 無目的な出会いから」

Designing communities; From aimless encounters

講演者 1 熊倉敬聡 (芸術文化観光専門職大学教授 元理工学部教授)

「インターキャンパス」そして「無目的スペース」三田の家」

講演者 2 坂倉杏介 (東京都市大学准教授 SFC 政策・メディア研究科特任講師)

「コミュニティのデザイン 無目的な出会い」

司会 岡原正幸 (慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員長)

22年度秋には試聴コンテンツをひとつ増やすことができた。長らく私が付き合いのあるネッケル教授 (ハンブルク大学) が東京大学の招きで来日し、出口さん (東大大学院教授) の誘いもあって三田での講演会を企画することができた。11月16日2時半から北館一階ホールで開催。動画制作も行い、これによって、4本の動画を採択者に提供することになる (採択者は内3本の視聴が必修になる)。元々はコロナ前からの企画だったが、2022年秋にずれ込むことで、コアプログラム動画の一つに幸運にも加えることができた。

講演者 ジークハルト・ネッケル教授 (ハンブルク大学) Sighard Neckel

## 「サステナビリティ 社会学的な視点」 Sustainability A Sociological Perspective”

動画配信で提供されるプログラムのほかに、対面参加を基本として、人と人が直接に出会う場所をプロデュースしたのが、22年度春より社研設置の研究科横断プログラム授業「プロジェクト（JST）」として実施されたワークショップやフィールドワークである。アート系、デザイン系のワークショップと社会学系のフィールドワークを柱にしている。言うまでもないだろうが、こういったイベントの基本には対面し会話するという経験が必須であり、これら対面活動の土台にもコミュニケーションがあることも明らかである。先にあげた動画プログラムとしての二つのシンポジウムが、アートの作用やコミュニティづくり（コミュニケーションのデザイン）を主題にしていたのも偶然ではない。義塾の若手研究者、Keio Spring 採択者の研究活動が、アートの思考や体験によって深まり広くなり、想定外に互いに結びつけられ、そして、社会へのチャンネルも多元化され、多様な人々とのコミュニケーションの開発や社会実装の可能性を拓くためだった。Keio Spring ではこれらをトランスファーラブル（移転可能）なスキルとして、SDM が主導するグローバル・リーダーシップに関するワークショップや人間交際事業とともに、採択者へのコアプログラムと考えている。

実際の A/D/C 対面プログラムは 22 年度については以下の通りである。その詳細は本稿ではなく、23 年度に創刊された The KeMCo Review に譲るので、ご関心があればそちらを見ていただきたい。

アート系、デザイン系ワークショップ

- \* 《強くないデザイン：正解からこぼれ落ちていくものたちへ》本間友（KeMCo 専任講師，講師（尾中俊介 デザイナー）
- \* 《痕跡とじぶんとのおいだ 現代美術家との SEA のワークショップ》本間友 講師（山田健二 現代美術家）
- \* 《VR/AR 技術を使った医療と芸術体験の接点》《Intersection of Medical and Artistic Experiences Using VR/AR Technology》小泉明郎（アーティスト），岡原正幸 講師（椿礼子 キュレーター，遠迫憲英 精神科医，ゴッドスコピオン VR アーティスト）
- \* 《ドキュメンタリー映像をつくる》《Documentary Filmmaking》小田浩之（映像作家）
- \* 《パフォーマンスアートをする》《Doing Performance Art》霜田誠二（アーティスト），岡原正幸

フィールドワーク系のコミュニケーション経験

- \* 《岩淵町限界を歩く 人と暮らしに近づく》《Exploring Iwabuchi-machi—Approaching People and Livelihoods》加藤文俊（政策・メディア研究科委員長）
- \* 《東日本大震災・原子力災害伝承館ツアー》《The Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museum Tour》岡原正幸，高山真（立教大学 助教）
- \* 《三田で歴史する》《Doing Histories in MITA》山口徹（文学部教授 文学研究科民族学専攻）  
実施未定とキャンセルされたプログラム
- \* 《滞在棟で、朝まで〇〇について語り明かす》《Discussions until morning》加藤文俊
- \* 《あいち国際芸術祭で、自分の研究に出会う》《Discover your research at the Aichi Triennale 2022》  
岡原正幸

さて、ではなぜ社会学研究科がアート系のプログラム？ この素朴な問いにアートの有効性とは別次

元で答えておこう。アートと社会学のある意味の親近さという文脈で語りたい。アートといっても、人類史を飾るそれであるよりも、先に紹介したアート系ワークショップが分類される「現代アート」という意味でのアートである。社会学と現代アート、社会学的思考と現代アート思考に共通する、あるいは等根源的なものとは？

#### この二つのアクション

- \* 世界自体にある丸ごと全て、ひと、こと、もの、何にでも問いを向け、自らの多様な活動の対象にしてしまう。Anything goes なんでもあり（公式教科書がない社会学、ジャンル素材表現多種多様なアート）。

#### この二つのアクションの歴史には

- \* 「あなたもアーティスト」「あなたも社会学者」と言っただけのレジェンドがいる。アート界ではボイスやウォールホール、社会学ではエスノメソドロロジーの元祖ガーフィンケルが、doing sociology 人々は社会学をしている、と言った。専門家集団と素人集団の境界を常に自覚している（そのため学位論文を書くには、美術史・社会学史に依拠するかどうかということがアカデミズムの真骨頂となる）

#### この二つのアクターのメンタリティには

- \* 世界の存在を、どうしてそうなのかを説明するだけではなく、別の様態、別の世界もあるだろうと思考する癖がある。語弊をおそれず言えば、常にSF世界を頭に浮かべている。

#### そして、この二つのアクターは

- \* 自己再帰的であって、アートや社会学という制度を批判的に捉え返す傾向があり、そのため、自分たちの方法、手法、歴史などに向け、それ以外もありえるはずだという姿勢をとる。現代アートも現代社会学も、およそあらゆる事物、事象を縦並びに捉える他の専門分野とは異なり、横串として、すべてにかかわろうとするアクションなのである。そのため、問いに対して、突拍子もない刺し方をとくにすることになる。

未来社会のグランドデザインには、アート（社会学）思考の問いが必須だと思う。タブーのない問い（？） 現在社会の延長戦上にとどまる未来社会ではなく、現在と轢断された未来をSF的に構想する想像力が必要だとしたら、アート体験はいつか役立ってくれるものと信じている。

最後に、社会学研究科が Keio Spring 採択者を対象に設置したコアプログラムに関しては 23 年度以降は、社研設置の授業「プロジェクト（JST）」を介さずに進めることとした。授業としての「プロジェクト（JST）」ではなく、まさにプロジェクト（JST）がさらに全塾的に展開されることになるだろう。

授業「プロジェクト（JST）」科目は、研究科委員長だった私の趣旨を研究科委員のみなさんに理解していただき、研究科委員会の認める科目として正規科目になった。企画のコーディネーターと運営を担当する 5 名、およびゲスト講師 9 名、そのほかに記録や庶務としての TA が 1 名で、2022 年度は運営された。担当者も研究科横断で、私の他に、山口徹さん（文学研究科）、加藤文俊さん（政策・メディア研究科委員長）、本間友（KeMCo 専任講師）及び、非常勤講師として、アーティストの小泉明郎さんがこの科目の担当者となっている。ゲスト講師としては、霜田誠二さん（アーティスト）、小田浩之さん（映像作家）、高山真さん（社会学・立教大学助教）、尾中俊介さん（デザイナー）、椿玲子さん（森美術館シニアキュレーター）、遠迫憲英さん（精神科医）、ゴッドスコピーオンさん（VR アーティスト

PsychicVR Lab), 山田健二さん (SEA アーティスト), 諏訪敦彦さん (映画監督 東京芸術大学教授) 等に協力していただいた。TA はハイスありなさんが務めてくれた。

最後に, ご協力をいただいたみなさん, 大学院社会学研究科の委員や学生部, 研究科秘書室のみなさんに, 感謝を申し述べて幕を引きたい。

#### 文献

- Masayuki Okahara. 2022. Don't Be Afraid to Be Performative! Doing Performative Social Science at Keio University in Tokyo, Japan. Kip Jones(ed.) Doing Performative Social Science Creativity in Doing Research Communities. Routledge.
- Masayuki Okahara/Alena Prusakova. 2022. Arts-Based Research in Sociology: Undergraduate and Graduate Degree Education. K.Komatsu et al(eds.) Arts-Based Methods in Education Research in Japan. Brill.